

外来古代文芸の変容局面

中 塩 清 臣

東漸してきた舶載の文芸因子が、大和王朝にうつされてどのやうな、変容局面をたどるにいたつたか、といふ問題路線に沿つてゆくと、直截ことに検証をしめす具体例が、孝徳紀にとどめられた献呈誄歌にみえてゐる。中大兄皇子の妃蘇我ノ造媛の祖逝を、追ひ悼む野中川原史満の詞彩をめぐつてである。中大兄皇子はもろろんちの天智天皇、先進大陸を謳歌して近江へ遷都を企図し、やがて「壬申の年の乱」さへ、みちびいてくる史的前提をふむ。

—：蘇我の臣日向、倉山田の大臣を皇太子に譲ちていはく、：皇太子これを信じたまふ。天皇、：蘇我の倉山田の大臣のもとにつかはして、反くことの虚 実を問はせたまふ。：大臣よりて山田寺の衆僧および長子興志にかたりていはく、：いひをはりて、仏 殿 の戸をひらきて、仰ぎて誓をたてていはく、「願くはわれ生々世々に君主を怨みまつらず」誓ひをはりて、みづから経きてうせぬ。

— 皇太子はじめて、大臣のころのいさぎよきことを知りて、：かなしみ歎かひ休みがたし。：皇太子の妃蘇我の造媛、父の大臣：斬らると聞きて、心を傷りいたみあつかふ。：造媛つひに死ぬるにいたる。皇太子、造媛みまかると聞きて、いたみたまひいさちたまふこと、きはめてはなはだし。ここに野中川原

史満すすみて歌をたてまつる。歌にいはく、

山川に鴛鴦ふたつゐてたぐひよくたぐへる妹を誰か率にけむ

本ごとに花はさげども何とかも愛し妹がまたさきてこぬ

皇太子、なげきうれたみほめていはく、「うるはしきかな、かなしきかな」すなはち御琴を授けてうたはしむ。絹四疋・布二十端・綿二裹を賜ふ。 (「孝徳紀」大化五年の条)

この記載は宮廷伶人の野中川原史満が、皇太子中大兄のことばを体してさしあげた、二首の代署詠をめぐつてゐる。殯宮(あらきのみや・かりもがり)で吟唱されてゆく実際に即してみると、皇太子がおこなふ葬送のための通過儀礼として、「みねたてまつる」(哀泣・発哀・哀哭・挙哀…)術呪をつとめた事態進行の一部分にあたる。うたのメカニズムは、もとより一人称発想法にある。うたの動詞化がうたふ(四段活)からうたふ(下二段活)へ。それを第三者・宮廷伶人がつくる場合に、すこしも条件転異をおこなないわけではない。三人称風の表現工程をととのへてくる。じつはそこに芸術意識のきざしが、ほのめいてゆくことになる。それにかういふ制作のプログラムは、様式も機能もともどもに、挽歌がたもつところの伝承軌跡のうへに、ゑがかれてきてゐながら、やがてしだいに新意

匠の方向軸をもとめはじめる。ときが大化改革断行のただなか、ところは皇太子妃のはふりの場、ひとに徴すると中大兄皇子・野中川原史満、といふやうな作品環境をとりまく位相関係にある。

大化元年(六四五)の六月十四日に皇極天皇は禅讓、ただちに同日に孝徳天皇が踐祚して、中大兄皇子をあげて皇太子とする。はかつて中大兄皇子・藤原鎌足が、蘇我入鹿を仆してのちの緊急時局である。十二月には難波長柄豊碇宮へ、大化二年一月を期して改新の詔がくだる。でも旧派退転をめぐつてしきりに、孝徳天皇と中大兄皇子との内紛がめだつ。孝徳天皇のプロモータは蘇我石川麻呂、中大兄をバツクアツプする藤原鎌足、つまりふたつの閥族の激突にひかれてゐる。つひに白雉四年(六五三)、孝徳天皇を難波の宮にすてて皇太子は、皇祖母尊(皇極)・間人皇后もるとも、飛鳥の行宮にうつる。蘇我石川麻呂は弑され、年あけて十月十日孝徳天皇の崩御。ここに蘇我家はとどめをさされてゐる。翌年(六五五)一月三日さきの皇極天皇は、飛鳥板蓋の宮で重祚して、ふたたび中大兄が皇太子につく。まるで蘇我の造媛とかよふ境遇なら、一条天皇の皇后定子のうへにもみえる。正慶元年(九九〇)内大臣藤原道隆の女定子が入内して、女御をへて中宮にのぼる。道隆は摂政・関白、定子にとつて兄の伊周が権大納言となる。長徳元年(九九五)に道隆が死ぬと、藤原道長は内覧の宣旨をたまはり、右大臣に任じられて氏の長者にをさまる。伊周と叔父・甥の近親だけに、すこぶる反撥し峻拒し危殆の血が血をよびかはす。つぎのとし不祥事から伊周を大宰権帥へ、弟隆家を権中納言より出雲権守におとす。中宮定子は落飾のうきめにあふ。道長は左大臣を占める。長徳三年(九九七)に赦をほどこされ、伊周・隆家はめしかへされる。長保元年(九九九)には道長の女彰子が、内裏にあがつてくる。二年(一〇〇〇)に中宮の定子は皇后にのぼり、女御の彰子が中宮に。だが皇后は産褥に

わづらひ、十二月十五日の夜ふけ(十六日)に神さる。その行年二十五にして、一条天皇は二十一とつたへてゐる。悲愴のきはみに一条天皇は、「よもすがら大殿ごもらず」、

野へまででこころひとつは通へどもわがみゆきとは知らずやありけむ(「後拾遺集」卷十の五四三・「棠花物語」鳥辺野の巻・「無名草子」)。

「死」におよぶ現象をもつて、靈魂の遊離逸脱とみてゐるので、むくろ(かばね・なきがら)をよるべに、たまごひ↓たままぎ↓たまよばひ↓たまふり↓たましづめをおこなふ。生理死は神道死でなかつたから。漢語「死」の概念定着にさきだつて、これと展開史のまつたくちがふ日本語「し」は、サ行変格活用をもちひてゐた。時の助動詞「き」が、未然形「せ」・連体形「し」の先蹤を、もつ経緯とも没交渉ではない。神人未分の生活空間で、死の認定にはそれだけの準備が必要だつたから、みだりにさういふ状況分析をことばにして、くちにだすことさへ禁止事項に属する。それでただ「し」↓「し」とばかりいつて暗喩した。「しぬ」は「し」を語根とした複合動詞、「しなふ」がさらにこの再活用である。まづその違反は「げがれ」(穢)をさそふので、きびしく「忌む」・「否なふ」(否なむ)慣行をみちびく。同時に「齋ふ」・「齋る」鎮魂詞章の類型表現は、発哭・挽歌から哀傷へとうつりかはる。記紀歌謠より万葉集をへて古今集以後につづく、文芸感性のタイミングともかさなりあふ。死のげがれにふれること(触穢)が、このうへもない「禍」・「禍事」をもたらず。そこで「禍」の機能を象徴化させて「禍祗」といつてゐる。「つ」は格助詞で「み」が低位靈格をさし、禍祗は「八十禍津日神」(神代記)として性格細分をとげる。おそれて「しつみ」とだけいつて禍祗を婉喩し、漢語の「罪」(刑)との觀念聯合にちかづく。罪を犯すとふさはしい罰をうけるが、これが

「つみなふ」「つぐなふ」である。天照大神の天の石窟いほほの麥の導入部は、忌機殿いみはたのハスサノヲノミコトが、馬の皮はぎをなげいたのでワカヒルメノミコトがおどろいて、みまかつた一件にかかつてゐる。それからアヂスキタカヒコネ綺譚では、天つ神のたたりでうせたアメカワヒコの喪屋へ、ともらひにきてアメカワヒコにまちがへられ、「あが君は死なずてまじけり」「あが子は死なずてありけり」と、よろこびさはがれてすこぶり憤り、つるぎをぬいて喪屋をきりくづしてかへる。つるぎの稜威で禍祇をはらふ(祓)フオクローアに根ざす。といふわけはつるぎの操作に、祓へ串がもつ等価作用をみとめてゐたから。ヤマトタケルノミコトがつるぎをふるつて火↓賊をはらふ、草薙のつるぎの由緒ともかよふ。はらふ・はらひは災厄まがひの拒否・追放にある。ひとまづ喪にしたがふことから、死をたしかめることもでもふくめて、けがらふ↓けがらふといふやうになる。けがらふの連用形名詞がけがらひ。

— やがてけがらひにしかば、 (「蜻蛉日記」)

— けがらひあるべきところにこそはべるめれ。 (「蜻蛉日記」)

— うち泣きて、けがらひも思むまじきさまにありければ、…… (「蜻蛉日記」)

— おぼえぬけがらひに触れたるよしを奏したまへ。 (「源氏物語」)

— けがらひたる人として、立ちながら追ひかへしつ。 (「源氏物語」)

「はらへ」(祓・攘)は、ふりかかると「すむ」(↓すます)・「きよむ」(↓きよまる)になる。祓の呪術工程を「祓戸神」の機能靈格にあてて、セオリツヒメ・ハヤアキツヒメ・イブキドヌシ・ハヤサスラヒメの四柱をかたどるが、「惟神」の本質を形成してゆく主導契機は、は

らふ・はらへへの厳修にいそむところにある。「…祓戸神たちは、法師をば忌みたまへば…」(「宇治拾遺物語」)とみえるから、さすがに仏教秩序とは一線を画してゐた。

— 「法師」等之鬻乃剃馬繫痛勿引曾「僧」半廿 (「万葉集」卷一六の三八四六)

法師・僧のほか桑門・沙門・釈僧・緇をも、書紀鈔本ではふしほしと訓読してゐる。道者・信徒の通称はほふしだつたが、とくに民部省の度帳に登録をゆるした成規の僧をよぶ(「出雲風土記」)。けれども陰陽道との接触法なら、むしろ習合・複融のかたちをとる。

— 陰陽師・かんなぎよびで、「恣せじ」といふ祓の具してなむ行きける。はらへけるままに、…ありしよりけに恣しくのみおぼえければ、

恣せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな (天神本「伊勢物語」六五段)

— 陰陽師を召して、はらへせさせたまふ。 (源氏物語「須磨」)

— つみなふ・つぐなふから「あがなふ」へ。「祓を科して罪を贖ふ」

(「類従三代格」)としるすとほり、刑部省の「贖贖司」(あがなひものつかさ)でとりあつかふ。あがなふの古形は「あがふ」である。

— 中臣の大祝詞いひはらへあがふいのちも… (「万葉集」卷十七の四〇三二)

— あがふいのちは妹がためこそ「万葉集」卷十二の三二〇二

— 酒・果物などとりいださせて、「あがひせん」といひかためで、… (「宇治拾遺物語」卷一一)

だから「あがひものつかさ」ともいはれてゐる。「あがふもの」は音価脱落して、「あがもの」(贖物)になつてゆく。

挽歌は万葉集卷二より正統をつたふ。「近江の天津の宮に天の下知らしめしし天皇の代」の作品抄をかかかて「天命開別の天皇、謚を天智天皇と白す」と旁註を点じてある。

天皇、聖躬不_レ予_レみたまひしとき、大后のたてまつれる御歌一首

天の原ふりさげみれば大王のみのちは長く天たらしたり
(：卷二の一四七)

天皇の崩りたまひしとき、倭の大后のつくりませる御歌一

……玉纒_{（かむり）}かげにみえつつ忘れえぬかも
(：卷二の一四九)

「大后」・「倭の大后」は天智皇后ヤマトヒメノミコト、古人大兄皇子の女である。大化元年九月に古人皇子は、謀反につらなつてゐる。天皇の大殯の儀に際して、「：大山守は誰がためか山に標繩ゆふ君もあらなくに」(：卷二の一五四)とよむ石川の夫人は、蘇我山田石川麻呂の女かといふ。だつたら造媛を兄姫として弟姫にあたる。

野中川原史満の野中は、河内国丹生郡野中郷(河内志)、「新撰姓氏録」河内諸蕃に河原連がみえる。天武朝以前の史姓で野中河原は魏人の裔といふ。川原史なら姓氏録右京皇別には、野中彦国葦命の後といつてゐるのだが。史部なら応神朝に帰属した漢高祖系の築浪漢人王仁、それから後漢靈帝系の帶方漢人阿知使主の族人がある。西史部(河内文氏―西文)が王仁の苗胤で、東史部(倭漢文氏―東文)は阿知使主の子孫といふ(「学令」)。

東漢・西漢史および百濟氏等を慕化となし、高麗および東部後部氏等を古風となすなり。
(「弘仁私記」序)

野中寺(大阪府南河内郡植生村―直言律宗青竜山徳運院)がたどる精神脈理は、肯定できる。「史」(ふみひとふびと)は中務省の

図書寮(つしよれう)の職員、頭・助・允・属のランキングがある。図書寮はのちに宮内省の一局、いまの宮内庁書陵部へつながらる。皇統譜・世伝御料台帳・天皇皇族の実録編修とか、典籍の保管出納とかにしたがふ。べつに「ふみのつかさ」(書司)は、禁裏の私会なり仏典校写なり、後宮の文房具・楽器をつかさどる。してみると野中川原史満が、河原連家の出自で図書頭だつたのであらう。齊明天皇の帝居は明日香川原宮(万葉集卷一の七の右―大和国高市郡高市村川原)、この川原宮址を賜はつて建てられたのが河原寺(万葉卷十六の三八五の左)である。

ひとしく秦大蔵造万里も帰化族だが、齊明天皇にかはつて哀歌を奏してゐる。治部省の雅楽寮↓歌舞所↓大歌所、それに楽所・内教坊につらなる伶人・楽人の任務のひとつが、推測可能にならう(和名類聚抄)。つひには歌人・歌所は、貴族で和歌専門の家筋をさす。だから満でも万里にしても、歌↓挽歌が綾なすリズム形象を、倭琴にあはせて作詞・作曲をこころみたわけである。のこつてゐる四譜・琴歌譜・承德本古謠集に、徴してもうべなふことができる。もしも「歌」↓挽歌の楽譜曲目としての伝承順位がなければ、誄詞の構成・組織はまとめあげられなかつたにちがひない。ときにはフォームができるとしても、ジャンルはつくりだされることではないのだから。史部は家憲から漢字漢文の学習教養をゆたかにもつ。まして撰善言司の公的活動いちじるしいエポックに、文法学はむろん修辭法にも、志向を勞するなりゆきはうなづける。

「山川に鴛鴦ふたつて……」は、「たぐひよくたぐへる」をおこす序、「鴛鴦ふたつ」で「たぐへる妹」を直喩してある。ことさらに野中川原史満の吟唱におよぶ副意識をうかがふとき、「閨帷之化」の理念と無関係ではないであらう。「詩経」の首章はかの関雎、うたはれてゐる詩の首句の二字をとつて、題名にしてきたのだが、詩経各篇

の総称ともなつてゐる。

— 関関雉鳩 在三河之洲 —

笏箕淑女 君子好述： (詩經)

好述の有徳を顕彰して「関雉之化」といふ。雉鳩はみさご雌雄の琴瑟すこぶる相和す(「和名類聚抄」・「新撰字鏡」)「物類称呼」・「重修本草綱目啓蒙」・「続万葉集動物考」)。

— よつて詩にいはいはく、関関たる雉鳩、君子の徳をたすくと、こゑ和かなる雉鳩の、河の洲にありて楽しめる体、幽遠としてその品あるがごとし、后妃のおの関雉の徳あつて幽閑貞専なる、君子のよきたぐひなり…。(「保元物語」卷三・新院御遷幸の条)

だが「山川に鴛鴦ふたつゐてたぐひよく…」は、美辞麗句にとどまるのではなく、殯宮のほとりの山川に鴛鴦がならぶ叙景、と決めることをすこしも不合理としない、民俗連念にもとづいてゐる。涉禽類・游禽類は「霊の放ち鳥」に擬してゐる。霊をもちはおおもむきから霊のよりどころとして、鎮魂呪術のためにことさら飼育されてゐる。もとよりさういふ職掌管理は、鳥取部・鳥飼部にゆだねられてゐた。「日竝みし皇子の尊の殯の宮のとき」の挽歌抄、

— 島の宮勾の池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜かす (万葉集卷二の一七〇)

— 島の宮うへの池なる放ち鳥荒びな行きそ君まさすとも (…一七一)

— み立たしの島をも家と住む鳥も荒びな行きそ年かはるまで (…一八〇)

— 鳥ぐら立て飼ひし雁の子巢立ちなば檀の岡に飛びかへり来ね (…一八二)

殯宮にあそぶ放ち鳥は、心要善にせまられた呪術目的による。鳥類

のうちでも涉禽・禽漁は、靈魂の寄代、招代としてあつかひ、つひには神実・靈質とさへみとめられた。すぐて水鳥を養ひつける理由は、人間からはなれた靈魂を誘きよせる、触媒のはたらきを託してゐる。だから「放ち鳥荒びな行きそ」・「住む鳥も荒びな行きそ」とうたひかける。「君まさすとも」・「年かはるまで」と条件をのべてゐる。殯宮↓霊床(万葉集卷二の二一六・卷十の二〇五〇)↓霊殿(紀略万寿三年四月十四日の項)の期間は、一年くぎりだつたから。王朝のをはりごろには、「霊の夜床」(右京大夫集)

・「霊の夜殿」(「栄花物語」嶺月)といつてゐる。△放ち鳥▽には鳥座↓鳥舎の設備、とどこほりなくしてゐる。飼つてゐた雁が児をうむのは、瑞祥へむかふきざしとして仁徳紀に録す。「万葉代匠記」で雁は雁のあやまりか、雁なら鷹の古字といふ。大鷹飼にてさぶらはせたまひける。

(「天福本伊勢物語」一一四段)

— 鷹取り飼ひたまふほどに： (「大和物語」)

— 鳥屋をはなれし荒鷹と： (「和泉式部集」)

— 鷹どもすゑて鳥の舞していできたり。 (「宇津保物語」)

— 鳥舎かへる白斑の鷹の： (「後拾遺集」卷六の三九三)

鷹とすると鷹飼↓鷹師・鷹飼↓鷹匠がやしなひ、鳥狩り(鷹狩り)につかふ。殯の鳥狩りは霊求ぎの手段である。つまり雁は候鳥だから、どうしても去つてゆく習性をもつ。「霊の放ち鳥」には適格かどうか。代匠記がいふやうに雁は雁にちがひない。雁のほかに鴨・鶴・鶯にしても候鳥、これを捕へてきて「池の放ち鳥」・「池なる放ち鳥」にしたてて鷹飼の管理対象とする。ひとくちに「鳥」といつて雉(「徒然草」)・鶉(「万葉集」卷三の三八二・天福本伊勢物語二二段)まで、特殊化してつかつてゐるが、「鳥の舞」は林邑菜のレパトリー、童子四人が天冠・羽衣のよそほひで、銅拍

子をうちながら伽陵頻迦に模してまふ（「栄花物語」鳥の舞）。
雅楽の伶人がかぶる「鳥兜」は、鳳凰のかしらにかたどつて、いた
だきはまへにとがり、鏗をうしろにつきだして、まるで翼を鳥がを
さめたやうす。あつかふ舞曲にしたがつて、形式・裝飾・色目をち
がはず。まだ白鳥処女説話がいきりてゐた、社会感情でのリアリズム
である。

— 妹に恋ひ寝ぬ朝明に鴛鴦のここゆわたるは妹が使か

（「万葉集」卷十一の二四九一）

— 池にすむ鴛鴦のつがひもねがはず浮世にめぐるちぎりと思
へば

（「新撰六帖」三）

— うちばらふ友なきころの寝ざめにはつがひし鴛鴦を夜半に恋
ひしき

（「紫式部日記」）

「妹に恋ひ」は八物に寄せて思を陳ぶるうた、「池にすむ」も
「うちばらふ友なき」でも、まづその系列を逸しないであら
う。「鴛」は雄の鳴きごゑで、「鴦」を雌のこゑとつたへる（「本
草綱目」・「大日本仏教全書本宝物集」三）ので、白文の「妹恋
男為鳥」とあてた表記法さへ、異性双飛を意識的にしてゐる。
「：鴛鴦のつがひも：契りと思へば」は、「鴛鴦の契」をときほぐ
し、「鴛鴦ふたつゐてたぐひよくたぐへる」は、「鴛鴦の偶」（李
白）をふまへてゐる。

— 鴛鴦、雄雌不相離、人獲其一二、則一相思而死、故謂之
匹鳥。

（崔豹古今注↓和名抄・本草綱目四七・東雅一七）

匹はひとつがひになる動物のかぞへかた、配・仇・偶・対・偶ともか
よふ。匹・儔・儔匹の熟語をつくと「鳳凰之匹儔」（曹昭・大雀賦）
へ。鳳を雄といひ鳳は雌といふ、構図でもかかはらない。鳳凰池・
鳳沼は禁苑の水域をさす。鳳凰があそぶと想定しての美称である。
常磐津の「鴛鴦容姿の正夢」・宮古路の「契情交鴛鴦」・富本の「妹

背鳥色源」の外題にうかがふやうに、鴛鴦をいもせどりといつてゐ
る。つれ・とも印象誘致からともどりとよびなれてもゐる。宮古
路の道行「ながれの友鳥」・長唄の「知鳥背袋」、これから演繹し
ての外題は「梅紅葉二人物狂」…。

「鴛鴦のつがひも：契りと思へば」も、思羽（↓劍羽・銀杏羽）を
ふまへてゐる。雄の背の両わきにたつ銀杏の葉がたの羽が、劍の
きつさきともまがふところから。

— 尾前有ニ小羽ニ如ニ船舵、或如ニ摺扇之半辺、俗称ニ劍羽。

（「本朝食鑑」五）

— 羽の末に思羽あり。状、銀杏葉のごとし。…ただ雄のみこの
羽あり。雌にはこの羽なし。

（「本草記聞」四七）

常磐津の「恋九成鴛鴦思羽」・「色逢夜半の思羽」に、富本の「契鴛
鴦夢劍羽」・義太夫の「真菰隠鴛鴦思羽」のかたりもの、長唄の
「鴛鴦鳥劍羽」・「仇浪鴛鴦思羽」につづいて、地唄の「鴛鴦の思
羽」のうたひものへ、伝承生態をみいだす。黒本に「おもひはの
池」がある。

— わかるるを惜しとぞ思ふ（イ・ひ）劍羽の身をよりくだくこ
ちのみして

（「拾遺集」卷六の三三五）

— 妹背の仲の恨事、かたくも岩に離れ鴛鴦、…あかぬわかれの
浮世の名残、鴛鴦の劍羽われからと、貫きとめし玉の緒の

（富本節「其佛浅間獄」）

— 思ひ羽にて王の首をかきおとし

（「曾我物語」）

— 恨みの劍羽、比翼の思ひ、翼を隔つる罪障を、思ひ知らさん
思ひ知れと、研ぎ立て鴛鴦の、劍羽打つて立ちかかる、

（「鴛鴦襖聞陸」）

鴛鴦を黃鴨ともいふ。思羽・劍羽・銀杏羽も、鴨に通じていつてゐ
る。鴨脚樹は公孫樹の別名、へいちようは鴨脚の唐音へやちや

の音訛事象とも、銀杏の唐音からの転調ともさく。葉状が鴨の蹠をしのばせるためである。江戸期になつて男子の鬻の一種に、「銀杏頭」とよぶのがある。はげさを銀杏の葉のなりに、末ひろがりひらたくしてゐる。といふと能面の「喝食」のひたひ髪。面の上で前髪を毛描きして、大喝食に河童型・中喝食が大形銀杏葉型・小喝食には小形銀杏葉型、と種類はわかれてゐる。喝食は禪家で大衆説経のちに、食堂の一面に立つて、こゑはりあげて就食をしらせ、食物の名を唱へて給仕につとめる役がら、もと喝食行者といつたのだが、有髪の侍重↓稚児になつてゆく。武家童子の喝食すがた―鬻をむすびうしろにたれ、肩のあたりで揃へる理容があつた。中世芸能ではふつうに△若の表象にしてある。たとへば四番目の喝食遊狂物「花月」・「自然居士」・「東岸居士」のやうな。：稚児から歌舞伎若衆へうけつがれ、しだいに街巷にはやつたヘア・スタイルが「銀杏頭」である。銀杏を圖案化した紋どころには、かなり分類はみえるけれども、隅切角に「銀杏鶴」の櫛紋から、とくに中村座の戲号はいちよう、とよぶ。「銀杏」は玉果ともいふやうに、実からの言語形象だつた。

倭にます后たち、また御子たちもろもろ、くだりいたりて御陵をつくり、そのなづきだにはひもとほりて、哭なかしつつ歌ひたまひしく、

なづきの田の稲幹に 稲幹に はひもとろふ ところ憂ここに八尋白智鳥に化りて、天に翔りて浜にむかひてとびいであましぬ。ゆゑに后たち御子たち、：哭なかしつつ追ひいでましき。このときになづきたまゆくな、

浅小竹原 腰なづむ 空はゆかず 足よゆくな
海処ゆけば 腰なづむ 大河原の 植ゑぐさ 海処はいさよふ

―浜つ千鳥 浜よはゆかず 磯つたふ…この四歌は、みなその御葬にうたひき。…いまにいたるまでその歌は、天皇の大御葬にうたふなり。： (景行記)

現にこの組曲は、大正天皇の諒闇のときも諷吟された。ヤマトタケルの白鳥軀身の奇蹟は、涉禽・波禽が「天の鳥船」(↓いはふね↓とりのいはくすぶね・あまのいはくすぶね)となつて靈をはこぶ、とみてゐた民俗思惟にもとづいてゐる。まづ、かひそれからあまはせづかひの観念聯合をとみなふため、枕詞「いたしたふや」が「いそつたふ」ともからまり、いそぎ(急)をみちびいてもくる(「水鳥の立ちのいそぎに」)。(万葉集卷二十四三三七)。山の稜線かけり海坂をこえて、海彼岸の神つどひ神づまる常世国へ、くもがくれゆく靈のすがたをしのぶ神あげうた・神さきうた。「：神さびをるかこれの水鳥」(万葉集卷三の二四五)とよみあげられ、「わたつみの神の宮の内の重の妙なる殿」(万葉集卷九の一七四〇)に、神しみてゐるすめらむつかむるぎのみこと、祖、アマツヒコヒコホホテミノミコトのおもかげがただよふ。浜は沙地のところ磯が岩むらのところ、海ぎはいざよひ磯つたふよるべに、よみのくにへかよふ八なづきの磯Vのフオクローアがある。

―北の海浜に磯あり。なづきの磯と名づく。：磯より西のかたに窟戸あり。：窟のうちに穴あり。人、いることを得ず、深き浅きを知らざるなり。夢にこの磯の窟のほとりに、いたればかならず死ぬ。ゆゑに俗人、いにしへよりいまにいたるまで、黄泉の坂・黄泉の穴と号く。(出雲国風土記)出雲郡宇賀(里)枕詞「白鳥の」は鷺―「白鳥の鷺坂山の松かげに」。(万葉集卷九の一六八七)とか、鳥羽―「白鳥の飛羽山松の待ちつつぞ」。(卷四の五八八)とかにかかがるが、まづをみちびいてくるよすがは必定である。川原(磯)は靈のさまよひもとほるかくれが、石神・石櫛

・石占から石打ち↓印地拍ちさへ、岩むらをもつて霊のありどころとみたててゐた心意授受にしたがふ。万葉集卷二の挽歌辟頭の「有間皇子、みづからいたみて松が枝を結ぶ歌二首」(一四一→一四二)へ、「山上巨億良、追ひて和ふる歌一首」は、

一 「鳥翔成」^{あまがけり}ありがよひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ (一四五)

「鳥翔成」は定訓をみないが、意味内容はうなづける。左注にとどめて「右の件の歌ども、柩を挽くときにつくれるにあらざれども、歌のころばせに准擬へて、ことさらに挽歌のたぐひに載す」といふ。つづけて天智天皇の大殯にあつたての大后の御歌一首^{みま}でも、

一 近江の海を 沖さけて…^{おほえ} 刃つきて ことぎくる船 沖つ權…^{つら} 刃つ權 いたくな撥ねそ わかくさの 孀のおもふ鳥立つ (一五三)

「鳥立つ」ことによつて霊のポジシヨンがうせてしまひ、復活・蘇生の主導契機をうしなふ。うたはれる鳥のあそびは、鎮鴛鴦のメカニズムに即してゐる。しかも夜禱曲にちがひない。「山川に鴛鴦ふたつゐてたぐひよく」も、哀歌であることはいふまでもないが、とかくさされひきだされてあらびがちな、魂魄の静謐をひたすらにねがふ夜禱曲^{よみ}。

天皇崩りまししとき、婦人がつくる歌一首
一 うつせみし 神に堪へねば…^{かみ} わが恋ふる君そ昨の夜 夢に見えつる (万葉集卷二の一五〇)

十市皇女 薨りまししとき、高市皇子尊の御作歌抄
一 三諸の神の神杉夢にだにみむとすれども寝ねぬ夜ぞ多き (…一五六)

山ぶきの立ちよそひたる山清水酌みにゆかめど道の知らなく (…一五八)

「山ぶきの立ちよそひたる山清水」で、黄泉をパラフレーズしてある。同時に山かひの水ほとり、山ぶき映えそふ実景描写にもまがふ。「山川に鴛鴦ふたつゐてたぐひよく」の技巧軌跡ともことなるところがなない。かういふ把へかた観照のしかたから、古代律文学史上のリアリズムがめばえたつ。

天皇崩りましし後八年九月九日、おほみための御齋会の夜、夢のうち^{ゆめ}に習ひたまふ御歌一首

といふ端書をもつ挽歌は、「古歌集の中にいづ」とある(万葉集卷二の一六二)。持統紀七年九月十日の条に、「淨御原天皇のために無遮大会を内裏に設く」とみえるのに呼応する。無遮会は聖凡・道俗・貴賤・上下のわかちなく、一切平等に財施・法施ふたつながら行ずる催しもの、僧尼をよびあつめて齋食をほどこす齋会もそのひとつ。神護景雲二年(七六八)以後には周期的に正月仏事として、大極殿でおこなはれてから御齋会とよぶ。

一…大殯のときにはあらねど雲がくれます

(万葉集卷三の四四一)

あ、あ、き、も、が、り、か、り、も、が、り、の、う、た、ぐ、さ、は、夜禱曲の特殊性格をたもつ。殯宮での哀哭の典礼は、神遊び・降霊操作にはじまる。さういう状況認証なら、アデスキタカヒコネ綺譚に際だつ。まふ・を、どる・くるふの振事は、神遊び・鎮魂呪術の序列から。まふはめぐりつつ足拍子をとつてふみつける。かなめかなめをならしめたためおさへしづめてゆく。舞踏として芸能の基本方式になり、踏歌とかさなつて節会化する。追悼歌↓哀傷歌は靈むかへ・神よばひを前提要因にもつ。外来魂とか遊離魂ばかりでなく、わかれて遠去る人をよびもどす交感作用にある。それをすみやかにうながす要求衝動は足ずりだつた。ヤマトタケルノミコトの御陵で、哭たてまつりながら入はひもとろふ「一連のうごきも、追悼歌にあはせてふるまふ悵恨実修

(日本古典文学大系本謡曲「砧」↓「弱法師」)
雅楽の「相府蓮」は平調の唐楽、晋の王儉が池に蓮を植ゑて怡しむ、高踏派の隠逸趣味だったのに、わたつてきたとき平安王朝の貴族たちは、「相夫恋」(相夫憐)としてうけとめてゐる。

一 在_レ天願作_二比翼鳥_一、 在_レ地願為_二連理枝_一。

(白居易「長恨歌」)

比翼の鳥・連理の枝がたどる、恋愛美学より誘致されてゐる。比翼の鳥は想像架空に属するが、異性とどちらも一翼一目だから、いつも二羽合体してゐるといふ。それで浮世草紙の「和漢善悪男色比翼鳥」一六卷・宝永四年出版—とか、洒落本の「仮郭南渚比翼紫」一巻・享和元年発兌—のやうな書名さへうむ。比翼の鳥の具象化を、鴛鴦にみとめてゐたのにちがひない。「鴛鴦塚」(李斗「揚州画舫録」)は比翼塚。合卷本の「婚礼雛形鴛鴦譚」一四卷・天保十三年上梓—みたいな、妹背結び—鴛鴦の偶(李白「去婦詞」)・鴛鴦の衾(陳子昂「鴛鴦篇」)・鴛鴦の被(「西京雜記」)・鴛鴦の契(「新編古今類聚」)・鴛鴦の被(「西京雜記」)・鴛鴦の契(「新編古今類聚」)のことにまでおよぶ。音曲芸能でなら「鴛鴦」には、新旧ふたとほりがある。富本節「四十八手恋所詠」は安永四年(一七七五)顔見世狂言、「花相撲源氏張胆」四建目の所作事だった(徳川文芸類徒本)。すでに宝暦九年(一七五九)十一月の「阿国染出世舞台」にとりこまれてゐるが、くだつて文政十一年(一八二八)正月中村座の狂言は「水滸伝曾我風流」、この所作事の上巻は富本浄瑠璃「四十八手恋所詠」、下巻が常磐津の「鴛鴦容姿の正夢」といふ組曲編成になつてゐる。常磐津史だけであつてもまへに、文化二年(一八〇五)顔見世興行の「蝶花形恋鴛鴦源氏」一番目に、「色逢夜半の思羽」があつた。曲としてはすたれてゐるが、上演台本をのこしてゐる(日本戯曲全集本)。富本の「妹背鳥色源」も絶えてきかないけれど、文化六年(一八〇九)十一月の奥州牧雪「騷」の振事に

。 「けいせい妹背纏」(は安政元年(一八五四)正月の封切だが、「けいせい素袍纏」よりでてきてゐる。さきだつて弘化四年(一八四七)正月の「綬三升曾我初夢」の所作物は、上巻を「恋角舩頭鏡」で下巻に「鴛鴦襖聞陸」の組曲、ふたつながら富本だつた(日本戯曲全集本・日本名著全集本)。この「鴛鴦襖聞陸」から鴛鴦とよびなれてゐる。「鴛鴦容姿の正夢」の改訂版が、安政二年五月市村座の「三幅対戯場色彩」の「をし鳥」で、長唄とのかけあひ趣向にあしらふ。六代目中村歌右衛門の蒼苔第一回の発表作品は、長唄「鴛鴦襖聞陸」である。

一 湖水に浮寝のあの鴛鴦、：伝へ聞く鴛鴦は、雌雄の執着深くして、その雄をこらすときは、たちまち雌鳥恋ひしたひ、思ひ死ぬるとためしに聞く、あ、雄鳥の生血を、酒にひたして服させなば、色におぼれて心を乱す、その虚に乗つて討ちとる計略。 (「鴛鴦襖聞陸」↓「三幅対戯場色彩」)

一 成化六年十月間、監城天縱湖漁父、見_二鴛鴦_一甚多、一日七_二其雄者_一烹之、其雌者随_二棹飛鳴_一不去、漁父方啓_二釜_一、即投_二沸湯中_一死。 (「貞初新志」一八)

シナの明代の葉小紉の戯曲に「鴛鴦夢」、清朝になつて路惠期の「鴛鴦縁伝奇」から、苑文若の「鴛鴦棒」とか黄燮清の「鴛鴦鏡」をみる。ゑがきだす純愛花譜のどれもが、むつみあふ鴛鴦の令聞にゆだねるところ、さながら同文同軌とでもいふしかない。

一 山川に食むや鴛鴦の妻鳥汝やこの世に七たび夫恋ひやする (「皇太神宮年中行事」)